

水無月

2023. 6. 1
美幌町図書館長 竹花 史康

梅雨のない北海道にとって水無月（水の月）は、最も清々しい季節といえます。6月になれば、学生は制服の衣替え、社会人はクールビズがはじまります。また、「ジューン・ブライド」の月でもあります。

最も陽が長くなる夏至が過ぎれば、本格的な夏がやって来ますが、その直前の爽やかさがなんとも好きです。

そんな初夏を感じられる与謝蕪村の俳句を一句紹介します。

落合うて 音なくなれる 清水かな
（おちおうて おとなくなれる しみずかな）

意味：岩の間を細く流れる清水が、やがて合流して水量を増し静かに音もなく流れてゆく・・・本当に爽やかな句です。

私が思っている北海道の初夏のイメージの一つに、青い空にそびえ立つ残雪を抱えた青い山々が浮かびます。そんな風景を思うと、種田山頭火の一つの句を思い出します。

分け入っても 分け入っても 青い山

意味：道なき道を分け入って、どんどん進んでも青い山ははてしなく続いている。

俳人として生きていくことを決意し、流浪の旅に出たときに詠まれたものだと言われています。ここでの青い山とは、夏の山ではないのかもしれませんが、でも、孤独で壮絶な山頭火の旅立ちに、せめてみずみずしい初夏の青さであって欲しいとなぜか思うのです。

